

「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学文学研究科博士 2年 山下 嗣太

中国そのものを研究対象とするわけではなくとも、日本やアジアについて学ぶ上で、中国を知ることは避けて通ることができない。特に自分にとっては初めての中国訪問だったこともあり、日本のメディアの中での中国のイメージと実際の生活との間に大きな乖離を感じ、中国への理解を深める大変貴重な機会となった。今後も継続的に中国語を勉強し、次の訪問時にはより深く現地の人々とコミュニケーションがとれるよう、学習へのモチベーションを高めることができた。

中国語の授業に関しては、本来は学期を通して行われる非中国語話者向けの中国語講座の、最初の二週間のみに参加するという形式であった。授業は文法や会話、発音がバランスよく構成されており、短期間ながらも集中的に勉強することができた。もし実際に一学期間参加できればかなり上達するだろうと、途中で帰国することを残念に思った。

授業以外の浙江大学でのアクティビティは、日本語専攻学生との交流授業と農学部の学生との交流会が一度ずつあった以外はほとんどなく、予定されていた中国文化に関する授業も突然キャンセルになったりと、京都大学との間で十分にコーディネートされているとはいえない状況であった。その代わりに、数人の日本語専攻の学生ボランティアが自発的にサポートしてくれた。授業後の連日の外出や外食にとどまらず、週末に泊りがけで蘇州・上海へ旅行した際にも同行していただき、ボランティアの学生たちにとっての経済的、時間的な負担はかなりのものであったことが想定される。そのため、一緒にとても楽しい時間を過ごせたと同時に、申し訳ない思いもすることとなった。両大学は、日本の学生だけでなく、ボランティアの学生も含めてどのようにサポートするかをより綿密に議論する必要があると強く感じた。

また、日々の生活がキャンパスの中と有名観光地のみで完結してしまっているため、杭州における一般的な人々の生活の様子を感じる機会が少なかったことが残念だった。単に語学を学ぶだけでなく、その都市に二週間という長い期間滞在することの意義を活かしたプログラムへと改良の余地があると思う。特に杭州という街は、大通り沿いのショッピング街と、街区の内部に塀で囲まれた生活スペースとしての集合住宅とのあいだに、空間的にも社会的にも隔たりがあり、日本から来たばかりでは生活空間の内部へのアクセスが容易ではないと感じた。そこで、このような生活環境の実態を学び、そして実際にそれを観察・経験できるような機会が欲しいと強く思った。

我非常感谢作为志愿者帮助了我们的浙江大学学生，是他们让我们度过了愉快的时光。在这次交流的基础上，今后我希望能更加了解中国。